

ドイツにおける行為重視の社会地理学： モイスブルガー編著の紹介

森川 洋*

Handlungszentrierte Sozialgeographie in Deutschland: Die Vorstellung von P. Meusbürgers Sammelband

Hiroshi MORIKAWA*

目 次

- I. はしがき
II. 論文概要の紹介
III. 考察：むすびにかえて

I. はしがき

ヴァーレンの教授資格論文『日常的地域化の社会地理学』第1巻 (Werlen, 1995/99) ・第2巻 (Werlen, 1997)¹⁾はドイツ地理学界に大きな刺激をもたらした。ドイツ地理学会ボン大会 (1997年10月7日) ではフォーラム「著者自身が批判に答える」が開催され、ヴァーレンとプロートフォーゲルやオーセンブリュッゲとの間に討論が行われ、多くの大会参加者の注目を浴びた。上記の両コメンテーターをはじめ「行為中心の社会地理学」に特に関心をもつ人たちが執筆し最後にヴァーレンの弁明を掲載したのが、モイスブルガーの編著になる『行為重視の社会地理学—ベノ・ヴァーレンの構想に対する批判討論—』(Meusbürger, 1999a)である。筆者は先にヴァーレンの著書『日常的地域化の社会地理学』第2巻 (Werlen, 1997) の内容の要約を試みたが(森川, 2000a), 本稿はその続編に当たる作業である。本稿は本書の主要部分を抄訳し若干解説を加えた筆者の覚え書きに過ぎないが、ドイツの社会地理学における最近の新しい動きは—英語圏地理学ほどではないとしても—わが国の地理学界にとって全く無関係ではないので、その紹介は無意味ではないように思われる。

編者モイスブルガーはインスブリュック大学 (オーストリア) 出身のハイデルベルク大学地理学教室の正教授で、小林浩二らとの共同研究 (小林ほか, 2000) なども行っており、日本の地理学者とはなじみが深い。専門は社会地理学とくに教育地理学の分野で、1998年

* 福山大学経済学部； Fakultät für Wirtschaftswissenschaft der Universität Fukuyama

には大著『教育地理学』(Meusbürger, 1998)を著しており、社会地理学や人文地理学全体に幅広い知識をもち、ドイツ地理学会でも中心的存在の一人である。最近大企業から資金をえて世界の著名地理学者に講義を依頼する「ヘットナー講義 (Hettner-Lecture)」²⁾を主宰し、若い地理学者の養成にも努めている。

編者の「序章-本書の成立と目的-」によれば、ヴァーレンの「主体重視の行為理論」はドイツではバーテルス (Bartels, D.) の地理学以来最も批判的論議を生んだ注目の研究であり、ヴァーレンはこのフォーラム開催にとって最も適切な候補者であった。彼の命題と概念は適度に過激で、議論の高揚にとって格好の存在であると述べている (Meusbürger, 1999b)。ヴァーレンの研究や英語圏諸国からの社会科学的アプローチの議論を通して、主体重視の行為理論がドイツ社会地理学のなかに新たな地平を開き、地理学に新たな推進力を与え、他の社会科学との新たな橋渡しとなると期待されている。したがって、本書はドイツ語圏人文地理学における理論的概念や方法に関する議論の発展を目的として書かれたものである。本書の批判のなかにはヴァーレン地理学に対して手厳しいものもあるが、いずれの論文も彼の理論を真向から否定するものではない。

モイスブルガーが筆者に語ったところによると、ドイツ地理学の論議にはこれまでいわゆる「ディスカッション文化 (Diskussionskultur)」と呼ばれる個人的な攻撃や批判が多く、英語圏にみられるように若い地理学者を含めて理論的にフェアに発言できる場が乏しかった。したがって編者は、そうしたフェアに論議できる場をつくるべきであるとの特別な思いを込めて本書を編集したといわれる。執筆者のうちチアホーファーはヴァーレンが推薦した編者にとって面識のない人で、シャフラネクも編者とは関係のない若い地理学者である。編者はこの問題に関心をもつできるだけ多くの人に執筆を依頼しており、各執筆者は自由な立場で執筆しているように見える³⁾。

以上の説明から理解されるように、本書にはドイツ地理学の理論的展開や当面する多くの問題が含まれており、ドイツ地理学者の理論的な立場や現状を理解するには格好の書といえる。以下において、ヴァーレンを含めた11篇の論文の概要を紹介し、最後に筆者の考えを若干加えることにする。

II. 論文概要の紹介

- 1) プロートフォーゲル (教授, デュースブルク大学) 「社会地理学のパラダイム転換か: ヴァーレンの行為重視の社会地理学の発想に対する批判」 (Blotevogel, 1999)⁴⁾

プロートフォーゲルはまずヴァーレンを評価する点として次の3点をあげる。①これだ

けが社会地理学ではないとしても、行為理論の社会地理学の概念はおおむね承認することができる。②1000頁にわたるヴァーレンの3冊（エルドクントリヘス・ヴィッセン89巻⁵⁾、116巻、119巻）の著書は、体系的な理論構築を行い、認識論に基づいて説明されており、理論面に弱いドイツ語圏地理学の致命的欠陥を補うことに貢献したといえる。たとえば哲学、物理学、心理学、社会学、経済学などでは空間に関する膨大な量の深い考察がみられるが、地理学では未だに「物的に充填された地表面」というナイーブな日常世界的な空間理解が支配的であるからである。社会地理学は、理論的根拠をうることによって学問的な競争力を高めることができる。③ヴァーレンのように「空間排斥主義 (Raum-Exorzismus)」に組みしようとは思わないが、形式的空間分析に基づく空間科学的な人文地理学が、実り豊かな成果をうることなく失敗に終わったとみるのは同感である、と述べている。

その一方で、プロトフォーゲルは批判点を大きく3分野に分けて厳しく批判する。第1に、ヴァーレンの空間存在論⁶⁾においては空間概念に多くの誤りがある。①ヴァーレンは哲学史の論議をカント哲学でもってうちきり、19～20世紀の哲学史を無視した上で、ニュートン (Newton, I.) やカント (Kant, I.) とヘットナー (Hettner, A.) ・パーテルスの間を直接関連づけて説明している。また、ポパー (Popper, K. R.) の三世界存在論 (Drei-Welten-Ontologie)⁷⁾についても誤解があり、ヴァーレンは精神的な現象や社会構造、文化構造は、社会的空間概念との関連においても地表上に立地しないものと考えている。②前近代、近代、近代末期という時代区分にも無理がある。社会発展論において、彼は近代社会においてみられた空間的に断片化した住民の社会的埋め込み (soziale Einbettung) が崩壊していく現象を脱定着化 (Entankerung) と呼び、前近代の拘束された社会と近代末の空間的脱定着化した社会とを対比しているが、ルネサンス期に生じた脱定着化などは無視されている。③ヴァーレンが「空間排斥主義」によって空間概念を放棄し、「空間を直接対象としない地理学」を主張するのは適切とは思えない。

第2には、行為重視の考察に関する問題と「討論の態度」があげられる。④ヴァーレンは、伝統的空間中心主義や客観的実証主義的社会科学としての地理学に対してだけでなく、レギュレーション理論や経済学全体についてまで容赦なく非難し、社会学のなかでも比較的特殊なギデンスの方法論だけを社会地理学の基礎理論として利用するのは不遜というほかはない。⑤ヴァーレンは行為者団体や行為者団体を不問とし、個人だけを行為者として強調するので、制度や組織の意義が著しくぼやけている。ヴァーレンの説明⁸⁾では、行為者の背後にある構造が視野から脱落する危険性がある。行為重視の社会地理学はマイクロ分析に適したもので、最近数十年間においては社会学や経済学においてもマクロレベルからマイクロレベルの理論的發展がみられるが、マクロレベルの分析法がすべて時代遅れとなった

というわけではない。構造や制度，組織は行為と補完関係にあり，人間行為を秩序づけるシステムであり調整システムでもある。⑥自然と環境や自然地理学と人文地理学の関係についても，彼の説明は一面的である。行為者は人間によってある程度馴化された自然のなかで生活しており，純粹の自然とは疎遠なことに注目していない。

第3には，学問発展論の側面について検討する。⑦行為重視の社会地理学は実証的社会学以外のなにものでもない。社会地理学がその道を進むとすればいくつかのシナリオが考えられるが，それが人文地理学のパラダイム・シフトを起こすことにはならないであろう。⑧地理学のパラダイム・シフトが生ずるためには，学界のおかれている状況が問題になる。バーテルス（Bartels, 1968）が空間科学的地理学を導入した1960年代末には，当時支配的であった地理学のパラダイムに対して大きな不満が渦巻いていた。それに対して，今日の人文地理学界には多くのパラダイムが競合しており，その大部分が共存状態にある⁹⁾。したがって，空間中心的社会地理学と行為重視の社会地理学のなかでどちらを選ぶかが問題ではなく，「空間崇拜主義（Raum-Fetischismus）」と「空間排斥主義」との間には理論的にも実用にも適したなお十分な「空き地」が残されていると考えられる。

2) オーセンブリュッゲ(教授, ハンブルク大学)「すべてが脱定着化され通常絡み合っている：ヴァーレンによる地理学の状況とその改革に対する意見」(Oßenbrügge, 1999)

オーセンブリュッゲは先に発表した書評（Oßenbrügge, 1997）¹⁰⁾との重複を避けるため，本書ではヴァーレンにみられる近代化理論の問題と構造理論と行為理論の関係についてのみ考察する。

ドイツの地理学理論に関する論争はこれまで初歩的な段階にとどまり，断片的に行われてきたに過ぎない。草創期の地理学者の多くは，地理学の価値をその記述能力に求め，その目的は日常的知識の包括的な再現にあるとみて理論的な基本法則を発展させたり，知識の意味内容を吟味することはほとんどしなかった¹¹⁾。最近ようやく地理学における議論排除の時代が過ぎ，ヴァーレンの「近代末期」に関する論議が脚光を浴びるようになった。

「地理学的アプローチは伝統的社会の調査には有効だが，近代や近代末期社会には意味をもたない」と彼は主張するが，ブロートフォークルが指摘するように，彼の考察する伝統的社会と近代末期社会との対比は正鵠をえているとはいえない。脱定着化は「組織化された近代」という文脈のなかから導かれるべきであるが，近代化の歴史を無視した彼の原則論は，近代初期の啓蒙家の主張に等しい。「組織化された近代」以後地理学の課題は変化してきた。たとえば，ハットナーによって重視された地誌図式（länderkundliches Schema）の説明は国家にテリトリーの解釈を与えることに貢献し，空間的カテゴリーの

科学化は国家組織を概念的に支援する地域区分や計量の方法として役立った。皮肉なことに、「組織化された近代」が終焉に近づいたときに、それ自身が地理学の論議に導入されることとなった。

1980年代の英語圏における構造・行為論争からみて、ヴァーレンが構造理論の見方を否定的に論ずるのはむしろ当然のことといえる。しかし、リピエッツ (Lipietz, A.) やハーヴェイ (Harvey, D.) にみられるように、レギュラシオン学派とマルクス主義の間には不可分の関係が存在するところから、構造主義陣営は静態的であって学ぶに値しないとするのは適当でない。「フォーディズムの危機」に表現される構造的変化を説明するには、レギュラシオン理論の方が構造化理論よりもはるかに高い説得力をもつといえる。

しかしともかくもヴァーレンの社会地理学は、地理学の社会理論的論議を強力に推進する勇気を与えた。彼に対する批判は、彼が価値ある研究を行ったことを無視するものではないと結論する。

3) ザール (教授, ブラジル UFPR) 「地理学論議における地域形成の場所」 (Sahr, 1999)

ザールは、ヴァーレンの意義をラッツェル (Ratzel, F.) の『人類地理学 I, II』やヘットナーの業績に匹敵するものと高く評価する。具体的には、①数多くの問題提起を行い、それを地理学の内部に定着させることに努力したこと、②彼は地理学の内容や特性に関する批判をおそれずに独自の構想を発表したこと、③英語本を刊行して国際的にも活躍したし (Werlen, 1993a)、理論的に豊かで多様な英語圏地理学との橋渡しをなしたこと、④彼は地理学の専門を超えて、ポパーの三世界理論、ギデンズの構造化理論などを導入し、学問間の障壁を除去することに貢献したこと、⑤なかでも彼の最大の貢献は、「日常的地域化の社会地理学」の理論体系が首尾一貫していることなど、があげられる。彼が『日常的地域化の社会地理学』第2巻の第6章で示した「生産と消費」や「規範と政策」、「情報的に意味をもつもの」などの地域化 (地域形成) に関する考察¹²⁾は、プロトフォーゲルが指摘したように都市地理学や農村空間の地理学には妥当しないとしても¹³⁾、経済地理学から政治地理学、社会・文化地理学に至るまで今日の人文地理学の巾広い分野を包含することができる。

ザール論文では、①ヴァーレン (Werlen, 1986) とヴァイヒハルト (Weichhart, 1986)¹⁴⁾、②ポール (Pohl, 1993) とヴァーレン (Werlen, 1993b)¹⁵⁾とを比較することによってヴァーレンの学問的態度や評価を鮮明にしている。またこの比較に基づいて、ヴァーレン理論の基本的概念に関する問題点をあげている。それは、①彼による伝統的社会と近代の区分は不明瞭であり、伝統的社会の説明では近代以外をすべて一括して扱い

(Werlen, 1995/99, S.91-103), 社会学者によるヨーロッパ中心的な発想に偏っている。
②プロトフォーゲルが指摘するように、行為主体に関する明確な概念化が不十分である。
③空間・地域化論争 (Raum-Regionalisierung-Debatte)¹⁶⁾や伝統と近代¹⁷⁾の対比概念は十分に説得力をもちえないものとなった、といった諸点である。しかし、冒頭で述べているように、ザールには全体としてヴァーレンを積極的に評価する態度がみられる。

4) ヴァイヒハルト (教授, ザルツブルク大学) 「世界をとりまく空間と空間の世界」 (Weichhart, 1999)

ケック (Köck, 1997) は, ヴァーレンのように空間という定着点をもたない地理学は正当でないとするが, ヴァーレンは逆に地理学を空間科学として構築することは不可能であると考えている。しかしそれは, 彼が空間概念を完全に放棄することを意味するものではなく, 古典的人文地理学の問題設定や認識目標を社会科学の理論や方法を用いて精緻化し, 今日の方法論的検討にふさわしい新たな空間概念の規定を提供するものである。

ヴァイヒハルトは地理学における空間概念の展開について概観するとともに, それを類型化しそれぞれの特徴について考察する。地理学の古典時代においては, ラントシャフトや地誌学が自然と文化の二元性を克服するものとしてとりあげられ, ラントシャフトのなかでは自然と文化の全体的融合がなされると考えられてきた¹⁸⁾。キール大会 (1969年) 以後のポスト古典期¹⁹⁾においても地域や空間が統合概念であると考えられており, 空間や地域が真の研究対象であり, 地理的実体として理解された²⁰⁾。キール大会以後地理学における脱空間化 (Ent-Räumlichung) の論議が高まるとともに, ポパーの存在論的な三世界論のなかでの説明が注目されるようになった。その際に, 個人重視の社会地理学においては, 三世界間の差異は異なった存在様式によるものではなく, 「同じ現実の異なった現象形態や組織形態」であると解釈されるようになった (Zierhofer, 1999)。

次に, ヴァイヒハルトは空間概念について以下のように分類する²¹⁾。①第1空間 (Raum 1) は, 地表断面や地表の部分領域といわれるもので, 物的世界の具体化された断面である。これには, 地域境界が不明確で特定地域を短縮して表記する一種の所在地情報 (例: 地中海地域) と, ある卓越した特定の特徴によって設定された地表面 (例: 山地地域) とが含まれる²²⁾。この概念は日常の生活世界にみられるだけでなく, あらゆる実証科学にとっても重要であり, 地理学においてはその草創期から今日に至るまで使用されている。②第2空間 (Raum 2) は物的に充填したものではないが, 現実に存在する「空の空間 (leerer Raum)」であり, ニュートンの容器空間 (Containerraum) ともいわれる。これには相対的な位置や方向があり, 3次元の広がりがある。ドイツ地理学ではバーテルス

(Bartels, 1968) によって空間的アプローチとして導入されたが、この概念はフォン・チューネン(von Thünen, J. H.) やクリスタラー(Christaller, W.), レッシュ(Lösch, A.) その他の立地論的アプローチにおいても暗黙のうちに使用されてきた。③第3空間(Raum 3)は抽象的・概念的なもので、空間的に秩序づけられたもの(Ordnungsstruktur)を意味し、そのなかに与えられた要素が位置づけられている。それはまた概念空間とか尺度空間といわれ、地形図や経緯度、GISなど地表を説明する用具はすべてこれに含まれる。社会階層やグループからなる社会空間も考えられる。これは包括的概念であるため、われわれが思考し区分するときには常に使用される。④第4空間(Raum 4)は抽象的に規定され、物質的なものと身体との関係によってつくられる空間的概念で、哲学者ライプニツ(Leibnitz, G. W.)によって説明された。そこでは空間は、サッカー試合の空間のように一時的に現れる現象で、「もの」ではなく特性として理解されることから「空間」というよりも「空間性(Räumlichkeit)」と呼ぶべきものである。この空間から「もの」を取り出すと後にはなににも残らず、「もの」なしには空間もない(Weichhart, 1993a, 1996)。しかし社会的事実や社会過程が物的側面と関係するときには、この概念が必要となる。社会科学の分野において社会の物的(空間的)側面と空間的側面をはじめて問題としてとりあげ、セッティング(Setting)と呼んだのは環境心理学者バーカー(Barker, 1968)であった(Weichhart, 1998a, 1998b)²³⁾。⑤第1e空間(Raum 1e)は、人々の日常生活に常に利用される主体の認識空間をさす。この概念は、常に具体的な地表断面を対象とするという点では第1空間と密接な関係にある。しかしそのなかには、間主観的(intersubjektiv)特性を備えた主観的感覚や主観的価値が含まれており、特定地域に対して集団や文化特有の価値判断や模倣やイメージ表現のようなものがある。それは、故郷とか居住地など日常世界の「体験した空間(erlebter Raum)」²⁴⁾であり、認知構築物(kognitive Konstrukte)として行動科学的地理学や人文主義地理学、行為理論的地理学などの重要な研究対象とされている。⑥第5空間(Raum 5)は、カントの認識論的な空間概念である(Werlen, 1995/99, S.201)。彼は批判先験哲学においてあらゆる経験の前にある経験の条件を明らかにしようとする。しかし地理学では、この空間概念は希にしか利用されない。

ヴァイヒルトによると空間概念は以上のように分類されるが、空間概念の地理学の使用においては今日まで2度の改変がなされた。最初の改変は第1空間の上に追加された「体験した空間」であり、それは、現実に対する認知的解釈のパターンと現実自体とを置き換えたものであった。伝統的地理学が生活世界的なラントシャフト概念を実際に対象としていることを発見したのはハルトであり、彼の教授資格論文(Hard, 1970)がその代表であった²⁵⁾。第2の改変は上記の第4空間にかかわる問題で、今日の地理学論議にみら

れる。それは経済構造や社会構造の空間性に関するもので、地域や地域発展と題する研究においては、経済的・人口的発展をもたらす要因として主体的行為者の身体的出会い (körperliche Kopräsenz der Akteure) に基づく相互作用構造の分析が行われた²⁶⁾。

上記の分類による空間概念は地理学の将来においてもよく利用されるであろうか。第1空間は自然地理学にも妥当し、その使用は将来においても全く問題がない。第1e空間も基本的には行為理論において絶対に放棄できない概念である。それに対して、容器空間 (第2空間) やカントの第5空間は行為理論地理学では全く使用されない。第3空間は「全空間の母」であり、最も包括的な概念であり、すべての学問において放棄することはできない。第4空間は行為理論の社会地理学が自己を主張しうる唯一の概念であるが、それは比較的短期の時間においてのみ存在するので、完全なかたちでは地図化されないという問題がある。

5) モイスブルガー (教授, ハイデルベルク大学) 「主体・組織・地域: 主体中心の行為理論に対する疑問」 (Meusburger, 1999c)

この論文ではモイスブルガーはブロートフォークルと同様に、ヴァーレンの社会地理学に対して全面的な批判を展開する。すなわち、①主体重視の行為理論においては、行為主体の自律性が強調されるが、それが重要な意味をもつのは西洋文化の個人主義社会においてである。②新しい作品やアイデアの創造には知識や能力、経験、創造性、学習能力が必要であるにもかかわらず、彼の教授資格論文では知識の重要性についての考察は不十分である。③ヴァーレンは、知識や情報は脱定着化した社会では空間的にどこでも任意の場所で好きなように利用しうると考えているが、これは実状に合わない。情報の把握もその解釈も空間条件とは無関係なものとして、あまりに簡単に捉えている。④今日の社会では組織の要求が高まり、個人は多くの生活圏のなかで組織内の力関係のもとで生活している。主体的行為者の行為は組織の目標や構造により、また組織内の垂直的分業の程度により、その地位によって異なるので、構造分析は社会地理学にとって重要である。⑤社会的状況や制度、構造がかつての人間行為の成果であるという彼の命題には賛成できるが、行為の結果には人間が数千年をかけて建設し遺産として遺してきたものすべてが含まれる。また、その行為は自律的な個人として行われたのか、組織の分業により規則や命令に従って行われたのかも問われねばならない。⑥ギデンズもヴァーレンも、社会の複雑化や分業・分化の発展や社会進化を否定すべきではない。これらの現象は、彼らの説明する社会の脱定着化の概念によっては不十分である。空間や時間の脱定着化が妥当するのは、間接的なコミュニケーションの発展やルーチン活動についてだけである。⑦ヴァーレンは社会科学の対象

となるのは主体的行為者ではなくその行為であるとするが、行為の大部分は直接的には観察されないし、事後においては特定の主体を抽出することさえ困難である。⑧地理学の強さは、1つの分析レベルだけでなく種々のレベルの分析の集合でもって知識をうることにある。地理学者の多くは、特定のテーマについてそれぞれ固有の尺度レベルでもって知識がえられるものと考えている。彼の方法論はマイクロ分析には適するが、マイクロ分析があらゆる問題や問題提起においてメソ分析やマクロ分析よりも常に正確な優れた知識を供給するとはいえない。⑨プロトフォーゲルやザールが指摘するように、前近代、近代、近代末期の時期区分が問題であるが、近代末期の生活スタイルについても余暇や消費活動に重点をおくのか、職業活動に重点をおいて考えるのかが問題となる。職業生活にみられる権力構造や地位の差異、人々の移動や経歴、犯罪、社会的あつれき、社会的差別などは社会地理学のテーマから排除されてはならない。⑩純粹の自然環境は主体的行為に全く影響しないとするヴァーレンの主張が、環境心理学や生態心理学と相容れないことはいうまでもない。⑪さらに、社会も文化も空間的現象ではないとするヴァーレンの主張は誤りである。社会や文化は、空間のなかでその秩序や分化が理解され説明されねばならない²⁷⁾。とりわけコミュニケーション行動は空間と強く関係している。

たしかに、ヴァーレンの主体重視の行為理論は今日の社会地理学の分野において大きな発展を遂げたが、問題点も多く、厳しい批判もある。とくに地域化（地域形成）概念については、ヴァーレンの主張する、①個人による日常的地域化（例：余暇や消費）の他に、②経済や社会における組織による地域化（例：企業活動）、③政治権力（法律）による地域化（例：行政区画）といったメソ・マクロのスケールにおける地域化も存在しており、それらを含めて考察すべきである。ヴァーレンが主体的行為に限定されることなく他のアプローチの重要性についても認めるならば、以上にみた批判の大部分を免れうるであろう²⁸⁾。しかしそれは、主体重視の行為理論の今後の発展の可能性がないというわけではない。

ヴァーレン理論に対する誤解や批判は、彼がわれわれになじみの薄い言語を使用したことにもよる。社会構造や組織、構造的力などについてはギデンズによって使用された一たとえば権威的・配分的資源（authoritative u. allokativer Ressourcen）やエキスパート・システムのような一概念よりも、従来から使用されてきた地理学専門の用語が使用されるべきである。ヴァーレンの社会地理学における構造や指標、軌跡、人工産物などの空間的広がりから、人間行為に関する結論や社会構造・社会過程に関する結論を導出しようとする努力が、将来の社会地理学においても重要であるだろう。また、社会地理学において環境心理学の知識をうることも重要であり、それによって、もはや以前のようにすぐに「決定論だ」と非難される心配はないだろうとモイスブルガーは考えている。

6) ハルト (教授, オスナブリュック大学) 「空間問題」 (Hard, 1999)

ハルトは、ヴァーレン理論の最大の貢献は地理学における空間的存在論を変化させたことにあるとし、ヴァーレン社会地理学を高く評価した上で空間問題に関する将来の発展について展望している。

ヴァーレンにあっては、空間は人間行為の文脈のなかで構築される概念である。彼の地域は精神的実在であり、単なる物的対象ではない。その目的は、行為主体によって空間構築物を再構築することである。主体重視の行為地理学による最も重要な貢献は、理論重視の行為概念や主体概念を地理学へ導入したことよりも、隣接科学の存在論グループと地理学の空間概念とを架橋したことにあつた。伝統的地理学においては物的空間 (第1空間)こそが地理学の空間と考えられ、ヴァーレンのように行為主体によって構築されたものを社会地理学者が再構築したメンタル空間 (mentale Räume) やクリューターのいう社会的コミュニケーションの要素としての空間抽象物 (Raumabstraktionen)²⁹⁾は、多くの地理学者にとっては現実の空間とはみられなかった。ハルトは、社会地理学にとっては社会理論や社会科学理論との関係が最も重要視されるべきであるとしながらも、ギデンズについてはそれほど高く評価していないようにみえる。

ところで、1998年12月に配布された「ルントブリーフ・ゲオグラフィ」第151号によると、人文地理学は社会科学であることは異論のない事実であり、そのことは人文地理学の対象である空間や空間関係にも妥当する。しかし今日では、社会学、政治学、経済学の研究者が地理学の対象とする空間に注目するようになった。それに対して地理学者は不安を感じ、「地理の終焉」³⁰⁾と題する論文タイトルまで現れた (Scholz, 1998)。空間の喪失は地理学の喪失を意味すると考えられたからである。「ルントブリーフ」第151号の末尾には「われわれの学問の対象が新たに発見されたり、大衆によって要求されるのはなぜか。それはいかにして生じたのか。なぜわれわれの書物やオリジナルな発想が彼らに伝わり、彼らの論文に引用されないのか」と訴えている。それに対してハルトは、新しい学問の対象が現れるのは各人の知識の学際化や学問の学際化に基づき、また思潮や経済的景気とも関係しており、地理学とは無関係に発生しているものとする。哲学者や哲学的自然科学者は近代の環境的危機から生態的、景観的、社会的自然に関する考察を推奨する。したがって、このような動きは全く無意味なものではなく学問のもつパラダイムの硬直性を打破することになるが、これらの発想から今日地理学にとって興味ある発言をうるのは困難であるとみている。

こうした人文地理学以外の分野において、空間を社会理論の理論的概念として本格的に考えたのはルーマン (Luhmann, N.) の弟子シュティヒヴェー (Stichweh, 1998) であ

る。彼にあっては、社会的事実とは物的なものであり、意味論や存在論のような社会科学の言語の差異はさして問題にならない。社会システムは意味 (Sinn) というなら空間性をもたない媒体 (メディア) を通して活動するので、空間現象はシステム理論のなかでは最重要な現象とはいえない。空間が現れるのは、それが社会の環境として評価されるときと、知覚や社会的コミュニケーションの媒体となる場合である。そして、システム理論を真剣に検討すれば第1空間³¹⁾だけが社会的事実であり、社会科学の研究対象となる。シュティヒヴェーは、社会内部でつくられる第1空間 (コミュニケーション要素としての空間) は、近代化とともに形態形成力を失ってきたとみる。同様に、社会外部の現象としての第2空間は、自然空間においても距離や輸送費においても力の喪失は明らかであるとした。このようなシュティヒヴェーの研究成果の特徴的な点をあげると、空間概念を社会理論のなかで理論構築の後に位置づけたことと、クリューター (Klüter, 1986) がルーマンのシステム理論と空間概念との接合をいち早く提案したのを認めたことにある。

しかし近代社会において、とくに社会的コミュニケーションにおいて空間の重要性が全体的に低下したとはいえない。社会的コミュニケーションにおいて、空間的次元は近代社会のなかで伝統的社会におけるよりも役割を弱めているわけではない。空間抽象物の分析や批判、合理化に特に注目する地理学は、それ自身社会を解明する能力をもつので過小評価されるべきではない。かつての「失われた空間」³²⁾の奪還をはかる都市社会学や地域社会学の研究において、シュティヒヴェーはルーマン社会理論にその空間への接合を求めている。第1空間が社会科学と社会地理学にとっての唯一の実際的接合点であるが、この物的空間概念はその一方で社会の環境 (社会的事実としての自然科学的説明) に関係しており、上記の第1空間・第2空間からなる「空間解釈の二重性」が示される。こうした空間問題に対する論議は、1980年代以降のアイゼル (Eisel, 1982) やヴァーレン、クリューターらの研究の核心をなすものであり、その成果でもあったと述べている。ハルト (Hard, 1993) はクリューターの主張を支持しており、ルーマン理論に依拠するクリューターとは近い関係にある。

7) チアホーファー (博士, スイス工科大学) 「ゆゆしき取り違え：地理学の自己認識」 (Zierhofer, 1999)

ドイツの人文地理学では1980年代初頭以来、地理学を空間やランドシャフトの学問とみるよりも、人間活動を考察する学問と考える人が増加している。彼らにとっては、人間活動は人間とその生活空間との関係を再生産し、変化させ、新たな出発点とするため、表現方法や意味と物質 (Materie) との関係が重要視される。人文地理学の概念のなかでは、

空間概念はそれほど重要でなく、地理学のアイデンティティの決定にとって必要不可欠のものではない。地理学が意味と物質との間を結ぶ社会科学であるとすれば³³⁾、意味と物質は具体的に把握されねばならない。「人間行為が意味、物質、社会関係のうえに成り立つとすれば、自然的なものは法則によって支配されるのに対して、精神的活動には相対的に大きな自由度がある」とする考えは、存在論的一元論とは相容れないことになる。実際には意味、物質、社会的関係の間には相互に結合関係が存在しており、その間にはカテゴリー的な差異はなく、意味³⁴⁾と物質とは結局のところ同じ存在物の異なった組織形態と考えられる。それでもってまず、存在論の問題は認識論的問題に変更される。シュッツ (Schütz, A.) の三世界概念 (自然的世界, 主体的世界, 社会的世界) を準存在論 (Quasi-Ontologie) と呼び、機能的に等価なものと考え、語用論 (Sprachpragmatik)³⁵⁾ の概念を援用することによって可能となる。そこでは物質、意味、社会的関係はコミュニケーションの産物や用具として理解される。精神・物質問題の語用論的理解が人間と非人間的存在との間の関係を明確にするので、行為概念と準存在論は重要であるとチアホーファーは考えている。

第2に、ギデンズの構造化理論もヴァーレンの社会地理学も、多かれ少なかれシュッツの行為理論の上に構築されているとみる。ギデンズもヴァーレンも社会秩序の理解についてはシュッツの構想を超えておらず、しかも行為理論の語用論的変形という点ではシュッツとの間に決定的な差異がある。シュッツにあつては、行為は個人的主体の活動にとっての重要な単位であり、社会構造はその間主体性による構築物であり、また社会秩序が個々の行為主体の考えを調整していると考えられる。シュッツはすでに言語的コミュニケーションの重要性を強く意識していたが、その後のハーバーマス (Habermas, J.) の「コミュニケーション行為の理論」において決定的な前進を遂げた。しかし、このような語用論的分析はすべての社会科学の求める事実内容に妥当するわけではない。言語行為は空間に関する最も重要な行為であるが、地理学には行為の非言語的側面 (たとえば行為過程によるラントシャフトの変化) も存在するので、語用論はあくまでも包括的な行為理論の中心としてのみ理解すべきであろうとチアホーファーは述べている。

第3には、会話行為 (Sprechakt) は価値を求めるので、社会関係に関する語用論的分析は必然的にその正当性の問題と関係する。社会科学の研究は社会構造に対してもう1つの新たな関係を提示するので、社会理論は批判理論となることが多い。しかし批判的社会理論においては、その知識の関心や選択、判断、評価の正当性が認められねばならない。批判的理論は誰のためのものかという点で倫理的問題とも関係する。語用論的行為理論に基づく社会分析は、他の行為理論的アプローチにはできない批判を可能にする。語用論を

用いた論議は、まず社会関係の硬直を流動的なものに変えていく効果がある。

最後に、チアホーファーは空間概念について考察している。シュッツによる上記の準存在論や語用論的行為理論は、人文地理学のすべての研究分野に概念的基盤を提供する。彼もヴァーレンと同様に「空間排斥主義」の立場をとり³⁶⁾、地理学は直接的には空間や空間性の概念を必要とするものではないと考える。各種の存在や分布、運動、拡大、形態、推移などの現象には空間概念を使用しなくてもなんら問題はない。地理学が空間を離れて人間活動を取りあげる場合には、行為理論でもって、空間意味論 (Raum-Semantik) よりももっと有効な社会科学的基盤をうることになる。空間意味論の喪失は研究にとってなんら欠陥にはならないと述べている。

とはいえ、語用論的行為理論のなかで空間概念の重要性を明らかにすることには意味がある。チアホーファーは最高度に抽象化した空間を第1級空間³⁷⁾とそれを具体化した第2級空間とに区分する。空間が地域区分の前提として考えられる場合には、それは一般に知覚や思考、知識、精神的秩序の手段とみなされる。第2級空間は、人間であれ他の生物であれコンピュータであれ、解釈様式の内容に関するものである。地理学が空間を秩序様式や解釈のシェーマとして利用せず、空間自身を研究対象と考えるかぎり、地理学は知覚手段を認識対象とすることになる³⁸⁾。このゆゆしき取り違えが今日の地理学の自己認識となっている。この意味では、ヴァーレンが「近代空間の存在論」というタイトルのもとで新たな構想をうちだし、前近代的空間概念から切り離れたのは妥当なものといえるという³⁹⁾。

8) クリューター (教授, グライフスヴァルト大学) 「空間と組織」 (Klüter, 1999)

クリューターは『社会的コミュニケーションの要素としての空間』 (Klüter, 1986) を著しており、ヴァーレンとは異なって社会地理学における組織の重要性を強調する。また空間への還元は社会的事実の重要部分を捨象しその解明にとって不十分であるとして、急進的な空間排斥主義を唱える。したがって、この論文でも組織の重要性を強調している。経済地理学や社会地理学の研究者の多くは、ヴァーレンをも含めて、形式的組織は初歩的役割しかもたないものと考えているが、クリューターは組織概念こそが近代的な空間抽象物の前提であるとみる。

森川 (2000a) でも示したように、ヴァーレン (Werlen, 1995/99, S.53) にあっては考察の中心はあくまでも個人である。人間にとって労働への動機は支配・権力構造のなかにもみられるが、彼はそれについてそれほど深く検討してはいない。「空間的秩序」や「地域境界の設定」についても、「権力構造の効力」を十分に追究していない。古いヨーロッパの伝統から行為概念における組織不足な点を明らかにしたルーマン (Luhmann, 1978)

は、「行為理論的な主体中心的思考にあつては、行為の責任問題に関する解釈が常に不十分である。組織システムは社会システムであり、それは各種の決定からなり、決定は相互に関連したものである」という。組織はメンバーを必要とし、そこにはメンバー規則が存在する。社会システムが発生するのは人々の間にコミュニケーションが行われるときで、クリューター (Klüter, 1986) はそれを空間的観点から説明している。社会システムは本来は空間的存在ではなく、その機能においては空間的境界を必要としないものと考えられるが、今日では行政空間に象徴されるように、テリトリー化が広くみられる。行政空間は、場所が個人や組織を結びつけるように、他のコードとの多くの結合の機会を与える。社会システムにとっては個人の住所よりも企業代表者の役割が重要である。その際に、住所空間は社会的主体を客観的に把握しうる唯一の地図である。

コミュニケーションによる接触においては住所 (場所) の必要性が高まり、企業は空間決定のために少なくとも3つの観点から住所を利用する。①消費者や供給相手の選択や生産者の価格選択において、匿名の住所空間や情報空間が利用される。②選ばれた顧客や供給者は補完領域の業務ネットワークに結びつけられる。ただし、③企業の立地決定や土地処分が論議されるのはごくわずかである。この3つのなかでは、大空間的なグローバルな分析からローカル・レベルの計算に至るまで、厳密な選択過程がみられる。今日ではコンピュータ技術の発展によって情報が集中するので、少数の中心地において価格形成が行われる。技術の進歩とともに、ヨーロッパでは企業や住民の移動性が高まり、財源も投資の動きも著しく増加してきた。そうしたなかにあつて、地域団体 (市町村) は地域にしっかりと定着した最後の「大企業」であるが、地域はローカルな地域特性をもつ総合システムとしての意義を著しく低下してきた。

今日では、人やものや情報の移動性の増大とともに、空間関係に関する偶然性が高まっている。1950年ころまでは技術面や輸送面のパラメーターが企業立地にとっては最も重要であったが、今日では政治、経済、信用などの社会的パラメーターの方がより重要な要因となっている。そこでは、外部条件に強制された行為よりも企業内においてあらかじめ予定されていたシナリオと別の新しい選択とのいずれに決定するかがより重要な問題となる。しかし、個人では迅速かつ十分に対応できないため、多くの決定は多くの組織によって克服される。そのため、空間利用の際には組織関係の役割が自動的に高まるのに対して、個人的、心理的、技術的、生物学的な決定要因はより偶然的なものとなる。したがって、組織理論が主体重視の行為理論に追加されるべきである⁴⁰⁾。行為システムや相互作用システムでは空間抽象物に対する要求が比較的不鮮明であるのに対して、形式的組織は空間抽象物とより明確に関係する。大組織による境界設定活動や構造形成的な活動が空間抽象物を形

成するので、形式的組織は長持ちする空間抽象物をつくりだす用具であるが、またその産物でもある。

コミュニケーション空間を対象とするクリューターのアプローチにおいては、「空間とはなにか」という問題は、「空間情報に関する事実がいかにかにコミュニケーションされるのか、誰がするのか、その空間抽象物はいかにしてつくられるのか、そこから第2次利用がいかにかに発生するのか」という問題に置き換えられうるという。

9) ダニエルチーク(博士, ドレスデン工科大学)「実証的地域分析の概念」(Danielzyk, 1999)

最近、国家権力の低下のもとで地域レベルに対する関心が高まっている。その理由には、ドイツの政治行政システムをイノベーション的に操作しうるのは、国家レベルではなくて、地域レベルだというシステム理論の論議から、グローバル化によって人々がフットルース化した代償として地域文化の評価や推進が必要であるとする人まで、さまざまな理由があげられる。しかし今日、広域政策や地域間協力が多くみられるとはいえ、「地域関係の再生 (Renaissance der Regionalen)」に関する概観的な出版物は少ないし⁴¹⁾、地域研究の概念的論議がとくに高まってきたわけでもない。しかし、そうした論議のなかでは経済的観点が支配的で、EU諸国では地域の競争力だけが注目されている。そこでは地域学 (Regionalwissenschaft) がたとえ認可されたとしても、「経済学者のための地図職人」に陥る危険性がある。

そうしたなかで、英語圏でもドイツ語圏でも地域科学研究の理論として最も重要な役割を演じたのは、レギュラシオン理論であった。この理論は、地域発展における経済的、技術的、社会文化的、政治的な種々の次元において統一的に考察することに努力してきた。しかし、構造理論・行為理論との関係においては問題が残されており、レギュラシオン理論はあらゆる面で正しいとはいえない。そのためダニエルチークは、構造化理論の導入によるレギュラシオン理論の発展が実証的地域科学研究にとっては重要であると考えている。ヴァーレンはレギュラシオン理論を強く非難しているが(Werlen, 1997, S.242)、ダニエルチークは構造化理論を追加すればレギュラシオン理論は改善できると考えている。

レギュラシオン理論は他の多くの社会理論とは異なって、特定の空間的単位やその空間構造の変化に関する分析を必要とする。その理論は国家の役割と深く関係しており、経済・社会の将来に関する広範な説明を可能にするので、計画や政策の研究にとって魅力的である。その中心的課題は、経済的再生産メカニズムに基づいて、現状を脅かしている要因や脅かされている社会を究明することであり (Hirsch, 1990)、社会構造や社会的規範の重要性を強調するものである。しかし、①正確な概念規定の説明が乏しい、②構造と行為の

関係に関する考察が不足する、③フォーディズムの崩壊については十分説明できるが、ポストフォーディズム生産に関する説明は不十分であるなど、レギュラシオン理論による実証研究には多くの批判がある。したがって、行為理論の観点からみると、構造的分析と行為理論的考察が共同して行われなくてはならない (Marden, 1992)。その場合に、制度は構造と行為の仲介役としてきわめて重要である。

レギュラシオン理論の実証研究においては、6つの第1次的テーマ⁴²⁾が考えられる。それは以下の通りである。①企業間関係：企業間分業の発展によって、階層的下請関係や専門企業間の協力ネットワークが今日注目されている、②労働・資本関係：両者間の関係の変化が注目される、③政治行政の構造と方法・戦略：政治行政構造やその方針は経済行為費用の地域差の評価にとって重要であるが、これを実証する簡単な指標はない、④日常意識と「経済文化および労働文化」：メンタリティや日常的意識は経済発展の結果であり前提でもある、⑤社会構造と行為パターン、⑥地域の構築：地域は区切られた単位 (bounded regions) として理解されるのではなく、社会的プロセスの基本条件としてまたその成果として理解され、地域自身は社会的構築物 (soziale Konstrukte) とみられる。

最近の社会では、以前のように明確に区切られる地域はもはや存在せず一連の地域化 (地域形成) の現象がみられるだけで、非物質的なネットワークとか物質的な相互交換過程の空間関係に関する研究がなされるだけである⁴³⁾。こうした状況下では、地域もこれまでとは異なった特徴をもつ。①上記の6つのテーマ分野はそれぞれ独立でなく相互に関連をもつこと、②各指標による地域分化への試み以上に、年齢や性や民族集団などによる域内の社会的分化が大きいこと、③今日の発展状況だけでなく歴史的変化や将来の発展傾向についても関心をもたれること、④実証研究においては特定の地域的文脈のなかで具体的な制度形態が研究されること、があげられる。

ヴァーレンは、従来のようなまとまりを欠く脱定着化した近代末期の地域のもつ特性を無視し、少なくとも暗黙のうちに絶対空間 (第1空間) を認め、社会的条件よりも空間的条件と強く結合するのは不適當であるとの理由で、ドイツ語圏における地域地理学の再構築の試みを強く批判した (Werlen, 1997, S.207)。たしかに新たな地域地理学においては、彼の主張する地域化は問題にされていないし、研究があらかじめ与えられた地域境界のなかに集中することも問題である。しかしながら、①多くの計画や政策に関する資料は、行政的にあらかじめ定められた調査地域のなかで得られ、②空間整備や地域政策は特定のテリトリーに妥当する法の枠内で実施される、という問題がある。もちろんこうした問題解決への意識も高まりつつあり、空間整備政策においては都市ネットワーク (Städtenetze) や「将来の地域」など、従来とは異なった試みもみられる。

10) シャフラネク (博士, ザルツブルク大学) 「地域的概念の問題とグローバル・ローカルの弁証法」 (Schafranek, 1999)

グローバル化の進展とともに、社会的実状に関する存在論は最近20~30年間に急速に変化し、社会地理学は空間重視の社会存在論の基盤を失ってきた。近代末期の地理意識においては主体 (個人) ごとに異なった世界観が発達し、人々は世界のいずれかの場所で生活すると同時に世界のなかで広く活動するようになった。こうした社会理論的背景のもとに、地域に関する新たな議論が燃え上がってきた。その場合の地域は規模的には、通常市町村と国家レベルとの間にある空間的広がりである。

地域概念の新たな発展は、多次元からなるグローバル過程のなかで生じた現象として理解されねばならない (Werlen, 1997, S.234)。グローバル化はすでに19世紀にも発生しており初めての現象ではないが、今日のグローバル化の中心はコミュニケーションの発達による脱定着化メカニズムという点に特徴がある。情報面における「世界村」の縮小は、同時にグローバルとローカルとの弁証法を生起させた⁴⁴⁾。ローカルに生活する主体の生活条件や行為条件は、著しく離れた関係地点の状況と直接関係している。最近では、国家権力の低下のもとで規制緩和や分散化、地域化の傾向が現れた。政治的地域化のプロセスは、ポストフォードイズム的な生産・消費様式の枠組にみられる新たな地域経済の発展と密接に関係してきた。経済地理学は最近とくにこの点に注目し、レギュレーション理論、「柔軟な専門化」アプローチ、イノベーションの環境概念⁴⁵⁾、ネットワーク概念などの発展がみられる。

こうした新たな地域発展は従来のように空間中心的アプローチではなく、社会的な展望をもって分析されるべきである。しかも地域レベルの考察にだけ集中すると、グローバル・ローカル両レベルによる主体行為の弁証法への接近を誤ることになる。地域は、グローバル経済の行為の補完分野として空間的な社会経済単位で論じられるときにだけ考えられるべきである。しかし今日ではたしかに、日常世界的な行為による空間構築が軽視されるわけではない。国家レベルの意義低下のもとで、グローバル化とともにリージョナル化の概念がよく使用されるようになった。地域的まとまりや地域レベルの再発見は、1970年代初頭における西洋社会の社会経済的な構造変化と強く関連するものと考えられている。

そうしたなかで、人間活動の脱定着化に基づいて空間を無視した論議も増加してきた。そこで重要なのは、社会は空間といかに関係しているのか、社会的事実が空間的カテゴリーに還元できるのかという問題である。ルーマンのシステム理論によれば、社会システムは決して空間的存在ではないという。社会システムは情報からなり、情報は空間的に固定されない。社会的関係を空間的言語でもって論ずるのは問題であり、空間は社会科学理論に

において分析の対象となるだけである。しかし、社会科学において人間存在の肉体性を不問とすることは、社会的関係の中心的次元にある社会的な人間行為の手段や条件、可能性さらには自然的・物的空間の意義を不明瞭なものにする。

したがって、空間の有用性は将来ますます強化されるであろう。その分析方法は形式的な物的空間だけでなく、行為の自然的・物的な空間的基礎を社会科学的な行為理論の観点から考察することにあるだろう。要するに、繰り返しになるが、ローカルに位置づけられた人々がグローバル化した生活条件のもとで行為するのが近代末期の社会である。グローバル化した世界的関係は、主体の身体的束縛に基づいて具体的な地表面にその出発点を持ち、その行為は社会的にも物質的にも周辺地域に影響を及ぼす。この意味において、空間計画の地域概念は時代遅れとはいえないものとシャフラネクはみている。

11) ヴァーレン (教授, イェーナ大学) 「行為重視の社会地理学：批判への弁明」 (Werlen, 1999a)

まずはそれぞれの論文の解釈について触れ、社会科学的地理学の1つの形態として、行為重視の見方でもって明らかにされる若干の重要問題を検討するのが本論の目的であると

する。

その第1は、ポパーの三世界論やシュッツの準三世界論の意味である。この問題について各論文はそれぞれ特定の見方や考察方法を示しており、批判の形態もそれぞれの条件によっているの、すべての批判に応えることはできない。社会地理学にも複数のものが存在し一体性があるとはいえないが、ある有力な見方でもって、できるだけ反論できないかたちで構想をまとめることが必要である。

バーテルスの空間的アプローチは、ポパーの批判的合理主義に発するもので、一般システム理論と結合するかたちで地理学的空間理論を発展させることを目標としており、英語圏計量地理学者における単なる新実証主義 (Neopositivismus) を明らかに超えた存在であったと高く評価している。彼は社会地理学の分野では「社会指向の空間科学」を唱え、社会構造の空間法則の把握に着目し、包括的な空間理論の体系的発展を目指した。しかし周知のように、経験的に妥当する因果法則の構築は自然科学にとっては重要な研究目的ではあるが、社会科学にとってはそれが目的ではない。バーテルスの空間法則に基づきかつ経験的に妥当する空間理論の発展は、少なくともポパーの発展理論から導き出されるものではない。1970年代半ばには早くも空間科学の研究方向は、人文主義地理学の行動的アプローチとの間に深刻な競合を生じた。とくにバティマー (Buttimer, 1969, 1976, 1979) は科学理論的説明の基礎をシュッツの現象学に求め、空間環境の主体的認識を考慮するこ

とによって、距離法則とは無縁の社会地理学を追究した。彼女はヴィダル（Vidal de la Blache, P.）の『人文地理学原理』を重視しながら、人間の多様な生活様式や生活形態を地理学の関心の中心におくべきであると考え、それを空間科学的地理学の「科学主義」に対する批判の基礎とした。

ヴァーレンが行為理論的社会地理学の可能性について考えた出発点は、クラヴァル（Claval, 1970）によって求められたように、ポパーの客観主義科学理論やバーテルスの社会的現実に対する方法論が「誤った基盤」の上にあることを主張することにあつた⁴⁶⁾。しかしやがて、バーテルスのポパーに対する地理学の理解は一方的で、ポパーの意図が正しく受け止められていないことに気づいた。三世界論の考慮に基づく自然科学的モデルによる学問の統合は、ポパーの研究では説明されない。また人文主義地理学との論議では、現象学的行動理論はシュッツの研究の上には構築されないことが明らかにされた。シュッツにあつては、人間意識や行為の意図性が研究の中心であり、主体的認知やそれによって生ずる反応は考慮されないからである（Werlen, 1999b）。しかしその後の分析によって、ポパーの批判的合理主義とシュッツの現象学はいずれも三世界論を踏まえており⁴⁷⁾、実際には共通の中核をもつことが明らかとなった。

社会地理学を社会科学的研究に導こうとする場合において、従来の試みでは空間中心主義（Raumzentrierung）から切り離せないところに問題があつた。そこでは、空間内での行為、空間的行動、空間的行為、空間的行動能力、空間行動の権限などの表現にみれるように、常に「空間」が研究対象とされてきた。しかし社会的現実を研究する場合には、社会形成の基礎となる人間活動の研究が最も重要である。行為理論的社会地理学すなわち「日常的地域化の社会地理学」は、それと競合するアプローチをも排除しないように心がけ、できるだけ高い整合性を求めてきた⁴⁸⁾。ルーマンのシステム理論を行為理論的な見方と接続しようとする試みは、本書のなかで論じられているように、その象徴的な事例といえる。

空間科学的地理学においては地域や空間概念が中心に置かれたが、行為重視の地理学では人々の日常実践（Alltagspraxis）が中心にあり、空間はその派生的次元として扱われる。そのような見方が明らかになったのは、①空間中心的な見方は、その関心や対象について社会科学的な見方とは異なっており、すべての空間理論が社会科学—社会理論にも種々あるが—と結合しようとは出来ない、②ある見方の概念を他の対象に移転するのはあまり効果的でなく、空間科学的アプローチを社会科学的基本概念と統合する必要はない、ということであつた。たとえば、ミュンヘン学派の社会地理学が「日常的地域化の社会地理学」へ接近するのは不可能と考えられる。

とはいえ地域や地域化は、伝統的地理学はいうまでもなく、空間科学的地理学にとって

も「日常的地域化の社会地理学」にとっても重要な概念である。伝統的地理学の地域概念では、自然との関係が強く、自然的基礎や文化・社会を全体的単位として記述することになる。一方、空間科学的アプローチでは、各地域の「科学的な」設定はある特定の知識によって特定の気候、植生、経済などの地域を形成する。各地域は空間的指標と内容的指標の2つの次元によって示され、個々の対象の広がりや考慮されたが、伝統的地理学にみられたように、分析によってえられた各地域を統合して考えようとする試みはなされなかった。これに対して社会科学的地理学では、地域や地域化は伝統的地理学のように、自然と関連した科学的な境界設定としては把握されないし、また学問的分類方法としても理解されない。そこではむしろ日常的地域化の実践に関する科学的究明、すなわち日常的地域の形成が問題となる。かくてギデنز (Giddens, 1981, p.40) は、地域化 (地域形成) を日常の実践と考え、地域を社会に適合したシンボリックな境界によって境された状況断面ないしは行為文脈の断面として理解した。そこでは、地域の意味内容は社会的実践 (soziale Praxis) からなり、意味ある構築物として理解される。

かくして、人間は歴史をつくるだけでなく地理をつくるのだと考えられ、地域概念に変化が現れた。かつては空間的カテゴリーのなかで社会が記述され説明されていたが、今日ではそれに代わって、空間的実状を説明する行為が追究されることとなった⁴⁹⁾。伝統的地域地理学における地域化の方法では、「自然に輪郭づけられた政治的プログラム」(Schultz, 1999) の発見が重要であり、空間科学的地理学においては特定の学問的・実用的関心に基づいて地域の境界設定がなされた⁵⁰⁾。伝統的地理学と空間科学的地理学の方法においては、主体が日常の実践のなかで地域を生産したり再生産したりすることは全くないか、あるとしてもわずかであった。それに対して、「日常的地域化の社会地理学」では地域化や日常的地域形成の日常の実践に関する学問研究が目標とされた (Werlen, 1999b)。「日常」とは人々が毎日なにをやるかという意味ではなく、「自然な振舞い (natürliche Einstellung)」のなかで経験し行為することである。

近代末期社会は脱定着化メカニズムの上に成りたつというギデنز (Giddens, 1991, 1995) の命題を受け入れる場合には、地域化 (地域形成) はグローバル化のもとで世界結合 (Welt-Bindung) の実践として理解される。世界結合は空間関係を社会的に支配し、自己や他人の行為をコントロールすることになる。その際に、ヴァーレンの社会地理学においては『日常的地域化の社会地理学』第2巻 (Werlen, 1997) で示したように、伝統的地理学や空間科学的地理学とは異なって、学問的な「空間構築」が研究の中心をなすのではなく、物的世界を分配や権威、情報によって取得し改変していく行為の形態が問題となる。世界を改変していく過程としての地域化は、空間的脱定着化への高い能力と可能性

のもとで、再定着化（Wiederankerung）していく形態として捉えられる。

ヴィダルは19世紀末において、地域的生活グループの研究とペイ（pays）を空間単位とするフランス国内の地域について、文化の地域的間仕切り（regionale Kammerung）の発見に努めたが、当時すでに大陸内部や大陸間には鉄道が開通しスエズ・パナマ両運河も建設され、欧米諸国の帝国主義は最高潮に達していた。しかし、ヴィダルはこれらの新しい動きが彼の目的とするモデル構築に決定的打撃を与えることになるとは考えようとはせず、彼の方法論に基づいて研究を進めた結果、彼の生活様式概念は急速に時代遅れなものとなった。地理学史にみられるこうした事件を思い起こしながら、ヴァーレンは伝統的地理学や空間科学的地理学を批判する。「地理学者の多くはヴァーレン理論に強く反対するが、彼らには将来の状況がみえていない。『日常的地域化の社会地理学』の任務は、グローバル化のもとで科学的方法を用いて日常的地域形成を調査研究することであり、それによって日常実践の社会地理学理論を発展させることにある」と。

III. 考察：むすびにかえて

以上が10人の批判論文とヴァーレン自身の弁明を含めた論文の概要である。まずヴァーレンの貢献について評価されるのは、人文地理学が従来社会的事実の説明に対して社会科学的世界観を無視して独自の発展を遂げてきたのに対して⁵¹⁾、それを社会科学のなかで考えようとして人文地理学のなかに科学的論議を巻き起こしたこと（Weichhart, 1998a）、日常的な人間行為による地理形成（Geographie-Machen）を重視し、新たな空間概念（ライブニツ空間）を導入したことにある。ハルト（Hard, 1998, 1999）は、ヴァーレンの大きな貢献の1つはこれまで存在論的には「スラム状態」にあった地理学の研究をクリアランスしたことにあるという。ヴァーレンが社会地理学を社会科学のなかに位置づけ、これまで理論的考察が乏しかったドイツ地理学に新たに理論的な考察の場を与えたことはほとんどの人が評価するところである。しかし、プロートフォーゲルが指摘したように、行為理論の社会地理学が新しいパラダイムになるには不足した部分も多く認められるし、実証的社会学に移行してしまうおそれもある。

一方、ヴァーレンの社会地理学に対する批判については、10人すべての論文が一応批判論文とみられるが、全般的な批判に徹した論文はプロートフォーゲルとモイスブルガーの2論文だけといってよい。両論文には共通点も多いが、プロートフォーゲルの批判では哲学的観点や地理学界の現状をふまえた批判が多いのに対して、モイスブルガーの論文では人間のもつ知識や資格の軽視に対する批判やメソ・マクロ分析への適用性に対する批判が

みられる。その他の執筆者では、ヴァーレンの貢献を高く評価した上で、それぞれの依拠する科学哲学や社会科学理論に基づく自己の立場との関連において論じたものが多い。

今日の近代末期における重要な社会変化は、グローバル化に基づく脱定着化と組織化であるといわれるが、ヴァーレン理論においては個人の行為ばかりが強調され、組織に基づく構造の重要性が軽視されている。システムや組織にあってもそれを動かすのは主体的個人の行為であるとするが (Werlen, 1995/99, S.46), 少なくともマクロ分析においては行為がいかに考慮されるか疑問である。そのことはプロートフォーゲルやモイスブルガーによっても指摘されているが、ルーマン理論によって構造の重要性を強調するクリューターは、自己の主張との関連において構造問題を取りあげる。ただし、クリューターが構造的側面こそが重要であるとはせず、「補足されるべき」であると控え目に述べているのは印象的である。またダニエルチークは、経済地理学における構造重視の立場からレギュラシオン理論との関係を検討している。一方、空間概念を整理しヴァーレンの貢献を評価したものには、ヴァイヒハルトをはじめハルトやチアホーファーがある。そのなかでは、上記のように、物質的なものと身体との関係によってつくられるライブニツの第4空間（空間性）を導入したヴァーレンの貢献が高く評価されている。また、チアホーファーはヴァイヒハルト (Weichhart, 1998a) と同様に、空間は地理学にとって研究対象ではなく手段である点を強調する。

ヴァーレンは、プロートフォーゲルらによる伝統的社会と近代末期などの時代区分に関する批判に対して、自己の誤りを認めているが (Werlen, 1999a, S.266), それ以外について逐一弁明することは避けている。その代わりにヴァーレンは、自己の地理学思想がいかにして発展してきたかを述べ、上記のようにヴィダルの例をあげて将来の社会への適合を先取りした理論であると考えている。

モイスブルガーをはじめ多くの批判者はヴァーレン理論の今後の理論的發展に期待している。これまで指摘されたように、ヴァーレン理論における伝統的社会と近代末期社会との対比をより精緻なかたちで説明する作業は残されているが、論理の一貫性がヴァーレン理論の長所の1つである点からして、ヴァーレン自身も指摘するように、いたづらな理論の拡大は折衷主義に陥る危険性もあるだろう。

本書の執筆者はさまざまな立場から執筆しており、決して一様なものではない。研究者によって異なる重要な問題点をあげるならば次のようになる。

- (1) 空間は人文地理学の研究対象かそれとも考察の手段なのか。ヴァーレンらの主張する「空間排斥主義」は容認されるべきか。この両者の問題には密接な関係があるので合わせて考察する。ヴァイヒハルトは、上述のように、「空間排斥主義」の主張者を

2つのタイプに区分し、急進派としてハルトやクリューターをあげ、ヴァーレンは穏健派に属するとする (Weichhart, 1999)。ヴァイヒハルト自身やチアホーファーも「空間排斥主義」のヴァーレンの立場を支持しており、人文地理学にとって空間は研究対象ではないと主張する。しかし、この立場が発展すると地理学を離れて社会学に移行してしまう危険性もある (Weichhart, 1998a)。これに対して、プロトフォーゲルは「空間排斥主義」や空間科学の発想の放棄に反対し、「空間崇拜主義」と「空間排斥主義」との間にはなお広い研究領域の隙間が残されているとみている。モイスブルガーは「空間排斥主義」には直接触れていないが、マッシイ論文をあげて空間の重要性を強調しており、「空間排斥主義」には反対している⁵²⁾。

- (2) 社会現象はすべて空間の上に投影されるのか、それとも両者の間には大きな差異があるのか。ヴァーレンの『日常的地域化の社会地理学』第1巻の副題「社会と空間の存在論について」(Werlen, 1995/99) が示すように、社会と空間との関係をいかに位置づけるかは、いまや社会地理学にとって最も重要な問題である。急進的空間排斥主義者といわれるハルトらは、社会現象のなかには空間に投影されないものが多く、空間的現象だけの考察は社会的事実の十分な解明にならないと考える。ルーマンのシステム理論によれば社会システムは空間的存在ではないとみており、ルーマン理論に依拠しコミュニケーション活動を重視するクリューターもそのように考えている⁵³⁾。ヴァイヒハルトも物質的關係(空間的關係)と社会的關係とは必ずしも不可分に結合してはいないので、社会現象を空間中心的な見方で論ずることは不可能であると考えられる (Weichhart, 1998a)。

これに対して、社会現象は空間に強く反映すると主張するのはモイスブルガーである (Meusburger, 1999c)。彼は「すべての文化圏において、社会構造の考察には形態的秩序パターンが利用される。空間性を論ずることなしに差異の同時性を説明できないし、相互作用を考えることもできない。空間性は新しい空間、新しいアイデンティティ、新しい関係、新しい差異をつくる根元である。空間自身は社会の生産にとって必要不可欠の存在である」というマッシイ論文 (Massey, 1999, p.38) を引用して説明する。さらに、中心・周辺や周辺グループ、アウトサイダー、セグリゲーションなどには常に空間概念が含まれているし、空間の建造物である環境を含めることなしに、行為は十分には説明できないという。空間の秩序シェーマが社会的事実を認知させ、秩序づけ、記述することを可能にするのはヴァーレン自身も認めることである (Werlen, 1995, S.205)。社会地理学が空間構造や空間的格差に関する分析や説明を中心的課題としないならば、それは人間の知覚の最重要メディアの1つを放棄する

ことになる。空間構造や重要な地点（場所）は、主体的行為者にとって無視できないものである。成功者のまねをして自己の誤りを避け、学習過程のコストを節約することができるのはどこでも同じではなく、ある場所においてのみ可能である」と述べている⁵⁴⁾。シャフラネク (Schafranek, 1999) も、上述のように、身体的関係を重視し、グローバル化した生活条件のもとでローカルに位置づけられた人々が行為するのが近代末期社会の特徴であるとして、空間と社会との密接な関係を強調する。もちろん、彼らにあっても社会的行為のなかに空間に関係しないものが全く含まれていないというわけではないであろう。

(3) 行為と組織や構造との関係はどうあるべきか。これについてはプロトフォーゲルのモイスブルガーがヴァーレンの行為偏重の考察方法を批判したし、クリューターが組織分析の重要性に述べ、ダニエルチークがレギュレーション理論について触れている。また今日の空間や地域は行為によって形成されたといっても、人類の歴史のきわめて古い時代に形成され、われわれの日常生活に組織や制度として影響を与えるものもある。これらの問題についてはこれ以上繰り返すは避けたい。

(4) 地域はどのようなかたちで存在するのか。伝統的地理学においては地域は通常「現実的地域 (realistische Region)」として理解されていたが、やがて空間科学的地理学の時代になると明らかに研究者の「分析による構築物」とみられるようになった。これに対してヴァーレンは、地域は日常的実践による地域化によって形成されると考えている。しかも彼は、脱定着化した今日の社会では以前定義されたような「外に向かって境され内部的には均質な地域」は存在せず、地域的な差異よりも域内住民の年齢やジェンダーなどによる社会的差異が顕在化していると考え。また地域意識の存在を強く非難するバーレンベルク・クームはコミュニケーション理論を支持しており、システム間の差異による地域格差は存在するが、同一システム内ではほぼ均質的で行政的なテリトリー区分が存在するのみであるとみている (Bahrenberg u. Kuhm, 1999)。しかし一方、空間整備のような実践的分野では地域は依然として有用であり、重要視されている (Sinz, 1995; Danielzyk, 1999)。

以上は人文地理学にとって本質的に重要な問題であり、新たな論議のなかでドイツ地理学者の意見は大きく分かれている。これらの問題点はいずれも重要なものであり、将来どのような方向に統合されていくかは科学哲学⁵⁵⁾や社会理論の進展にもよるところが大きい。しかし一方では、新たな観点からの実証研究がいかに行われうるかが重要な問題である。その点では、出版が遅れている第3巻として予定された『日常の地理－実証的調査結果』(Werlen, 2001)の出版が待たれるところである。

謝辞

本稿の執筆に当たり大変お世話になった Meusburger, P. 教授（ハイデルベルク大学）、Blotevogel, H. H. 教授（デュースブルク大学）や Wardenga, U. 博士を中心とするドイツ地誌研究所地理学史・方法論研究部門の方々、Weichhart, P. 教授（ザルツブルク大学）に対し、また、独文レジュメを校閲していただき広島大学の Funck, C. 講師や有益なご指摘をいただいた地誌研センター編集委員に対し、厚くお礼を申し上げます。本稿の作成には文部省科学研究費基盤研究 C(2)12680085（2000～2001年）の一部を使用した。

注

- 1) 『日常的地域化の社会地理学』第3巻（Werlen, 2001）は教授資格論文には含まれておらず、書名を『日常の地理—実証的調査結果』に変更して1999年の刊行が予定されていたが、2000年8月現在なお刊行されていない。第3巻はヴァーレンが教員をしていた頃に実地調査した論文を実証研究としてまとめようとしているが、種々の困難な問題のため刊行が遅れているものと推定される（ヴァルデンガ博士のご教示による。2000年8月28日）。
- 2) 「ヘットナー講義」は1997年に始まり、講演したグレゴリー（Gregory, 1997）、マッシー（Massey, 1998）、ワッツ（Watts, 1999）の報告書はすでに刊行されている（マッシー以外の書名は省略）。
- 3) 本書では、フォーラムのコメンテーターを務めたプロートフォォーゲル・オーセンブリュッゲ両氏の論文を最初にとりあげ、ヴァーレン論文を最後に据えているが、その他の論文の掲載順位にはそれほどこだわりがないように見える。ただこのなかにバーレンベルク（Bahrenberg, G.）教授の論文がみえないのがさびしい。
- 4) プロートフォォーゲルのこの論文は Blotevogel (1999) : Institut für Geographie, Diskussionspapier 1/1999 として発表されたため、森川 (2000a) にも引用している。
- 5) これは『社会、行為、空間—行為理論的社会地理学の基礎—』と題する学位論文（Werlen, 1987）で、第3版は大幅に増補されて1997年に出版された。
- 6) 存在論（Ontologie）は存在様式（Seinsweise）であり、分析哲学ではポパーは物的、精神的、社会文化的事実という異なった存在様式（三世界論）に区分するのに使用したが、実存哲学のハイデッガー（Heidegger, M.）は人間存在の意味に使用する。ギデンズの「近代の存在論」は「近代社会における人間の存在様式」を意味する（Werlen, 1995/99, S.32）。
- 7) ポパーのいう第1世界は物的世界、第2世界は心理的生活における精神的世界、第3世界は客観的な空想の世界を指す。記号や言語、規範、社会制度などは第3世界に属する（Blotevogel, 1999；Hard, 1993）。
- 8) ただし、ヴァーレンも「改正された方法論的個人主義（revidierter methodologischer Individualismus）」の立場に立って、社会制度や組織について検討しており、この問題を完全に無視しているわけではない。種々の社会現象は行為によって起こり、また社会や文化は以前の行為によって形成されたものである。しかし、組織や集団それ自身が行為をするのではなく主体的行為者となりうるのは個人だけであると考え、組織や集団の形成や変化は結局のところ集団内の主体的行為者の決定や行為によるものとみる（Werlen, 1995/99, S.44）。したがって、行為や行為の結果が最重要な研究対象であり、構造や組織の考察は第2義的なものとする。
- 9) ドイツ人文地理学においてはラントシャフト概念が崩壊した後、空間科学的地理学に定住することなく行動地理学的社会地理学（ほぼ1968～78年）や有用性を追求する「有用性革命」（1970年代）、文化地理学・社会地理学の解釈論的変更（1980年代）、人間生態学的革命（1990年代？）など学問的革命を続け、複数のパラダイムの共存とともに、中核的パラダイムの欠如によって人文地理学は分裂していく方

- 向にある (Blotevogel, 1998)。
- 10) 森川 (2000a, p.112) を参照。
 - 11) すでにカントは地理学を学問の記述的前段階 (deskriptiver Vorhof) として捉え、ハーバーマス (Habermas, 1981, S.26) は200年後にそれを証明したといわれる。ヴァーレン (Werlen, 1997, S.5) によると、カントは地理学をなお学問のレベルに達しない前座的 (wissenschaftspröpedeusch) な学問とみていたが、場所の知識については重要なものと考えていたといわれる。
 - 12) 森川 (2000a) を参照。
 - 13) これらの分野では、過去の間行為の蓄積が大きく、今日の主体的行為による地域化の影響が小さいことを指す。
 - 14) 両論文はともに行為理論を要約したものであるが、ヴァイヒハルトがドイツ語圏の機能論的社会地理学 (ミュンヘン学派) との論争や行動主義にその出発点を求めたのに対して、ヴァーレンは空間的アプローチや人文主義地理学をめぐる英語圏の論議をまとめている。そして、ヴァイヒハルトはドイツの地理学論争のなかで活躍したが、ヴァーレンはドイツの伝統的地理学を代表する「公的機関」の地理学から一少なくとも一時的には一離れていった。
 - 15) 1992年の地理学コロキウム「空間なき地理学は存在するか」において論じたもので、ヴァーレンは伝統と近代、個人の脱定着化過程について論じ、空間は地理学にとって直接的な研究対象ではなく、社会生活にとっての重要性のなかで、行為の物的手段としての空間的側面に集中して研究すべきだと主張した。これに対して、ポールは各学問には特有の研究対象があり、地理学にとっての一若干問題はあなが対象は空間であり、その対象は理論的方向に高められなければならないとみる。ポールは、地理学内部で活発な論議が始まらない限り、理論的には隣接科学に決定的に従属することになる危険性があることをおそれた。
 - 16) ヴァーレンらは従来の地域よりも地域化を重視する。この地域と地域化の間の論争をいう。
 - 17) 近代がいつ始まるかの判断は人によってさまざまであるが、ヴァーレンはその起源を17世紀の啓蒙化においている。
 - 18) 1950年代半ばの古典的なラントシャフト地理学が最盛期にあったと考えられる1950年代半ばに、具体的に研究を実施しうるラントシャフトの定義が不十分であるとカロール (Carol, 1956) が批判したのは、驚くべき卓見であったといわれる (Weichhart, 1999)。
 - 19) 空間科学的な地理学が発達した時期を指す。通常キール大会がドイツ地理学の転換点と考えられるが、フリートナー (Friedner, 1993, S.233) のように、1950~60年にはラントシャフト概念やそれと関連した地誌学が批判され、計量的手法の採用や機能的手法の完全実施など新しい動きがみられるとする人もある。たしかにキール大会は大事件ではあったが、それ以前から新しい流れは始まっていた (ヴァルデン博士のご教示による。2000年11月24日のメール)。
 - 20) しかし、早くもキール大会以前にゲーリング (Gerling, 1949, 1954, 1965) やツァヴァコヴァツ (Szava-Kovats, 1960) が「認識論を欠く構築物」と指摘したのは注目に値する。
 - 21) このような5つの空間分類はヴァイヒハルト (Weichhart, 1998a, 1998b) にもみられるが、プロートフォーゲル論文 (Blotevogel, 1993/95) については全く触れていない。この分類は、プロートフォーゲル (Blotevogel, 1993/95) の7つの空間分類とは空間の番号だけでなく、内容的にもかなり異なる。とくにライブニツによって説明されたヴァイヒハルトの第4空間はプロートフォーゲルでも第4空間として位置づけられているが、プロートフォーゲルは関係空間と考え、立地論などの空間理論 (ヴァイヒハルトでは第2空間に含まれる) もここに属する。そして、バーカーのセッティングも主観的空間や「体験した空間」、認知空間とともに、第6空間に入れる。プロートフォーゲルが執筆した1993年にはヴァーレンの Schauplatz について認識されていなかった。なお、分類の差異については分類の目的とも関係すると考える (プロートフォーゲル教授のご教示による。2000年11月24日のメール)。
 - 22) 地理学の地域におけるエリア (area) とリージョン (region) はいずれもこの類型にいるものと考えられる。
 - 23) この空間はポパーの三世界論の個々の世界には該当せず、ハイブリッド空間 (hybrider Raum) といえる。同様の空間をギデンズは Locale と呼び、ヴァーレンは Schauplatz と呼んだ。

- 24) 「体験した空間」は「生きられる空間 (espace vécu)」として知られるが、1930年代初頭にフォン・ドウルクハイム (von Durckheim, K.) やミンコフスキ (Minkowski, E.) によってその概念は開発されたものである (Blotevogel, 1993/95)。ドイツ地理学ではハルト (Hard, 1970) らによって導入された。
- 25) ヴァイヒハルト教授のご教示による。2000年6月23日のメール。
- 26) 英語圏ではこうした研究に重要な役割を果たしたものとして、プレッド (Pred, 1984, 1986) のような新しい地域地理学 (new regional geography) の研究者をあげることができよう。
- 27) これに対して、ヴァイヒハルト (Weichhart, 1998a, S.76) はヴァーレンと同様に、物質的關係と社会的關係とは決して不可分に結合しているわけではない、つまり社会現象のなかには空間に現れないものがあるとみる。空間中心の見方は社会現象との学問的論議のもとでははじめから破滅していると考えており、モイスブルガーとの間には著しい差異がある。ただし、彼は以前の論文 (Weichhart, 1996, S.39) では、マッシイ (Massey, 1992) と同様に両者の関係を重視し、「地域は社会構造のシステムに内在する構造原理 (systemimmanentes Strukturprinzip) である」としている。
- 28) ヴァーレン自身が本書で触れているように (Werlen, 1999b), それは折衷主義に陥り、論理の一貫性を失うことになる可能性もある。
- 29) これは後述のクリューターの論文に登場する術語である。ポパーの第3世界 (客観的な空想世界) にみられる地図や計画書、祖国概念などの空間構築物を意味する。これらの空間構築物の機能は、複雑な内容をもった情報をより簡単で実用的な空間情報に置き換えることにあるが、それは反面、コミュニケーションのもつ詳細な情報を妨げ、その研究成果を限定されたものにするにもなる (Hard, 1993)。
- 30) 隣接科学が問題にしているのは距離や面積などの「地理的現象の終焉」であるが、論文タイトルでは「地理学の終焉」をおそれている節もある。
- 31) シュティヒヴェーの第1空間と第2空間は上記のヴァイヒハルトやプロートフォーゲルの空間概念とは異なる。
- 32) 1970年代初頭には学際的な「地域」の研究ブームが生じた。新古典派経済学の純粹に抽象的な1地点主義 (ein-Punkt-Wirtschaft) の見方は、実際の経済生活から乖離したものとなったからである。そうした新しい見方の代表がレギュレーション理論とみられる (Schafranek, 1999)。
- 33) チアホーファーはグレン (Gren, 1994) を引用している (Zierhofer, 1997, 1999)。
- 34) 「意味」には物質 (身体的存在) にみられる創発性進化の現象 (emergentes Phänomen) が含まれる。その例としてよくあげられるのは火薬の事例である。火薬は本来爆発する性質をもってはいるが、いつでもどんな条件においても爆発するというわけではない。
- 35) 哲学は20世紀初頭に意識の哲学から言語の哲学へとパラダイム・シフトを起こしたといわれるが、語用論が取り上げられるようになったのは最近のことである。ハーバーマスによると、社会生活の大部分は言語行為によって構成されているという。彼は、すべての言語コミュニケーションは相手の行為に影響を及ぼすので、言語使用は社会構造分析の鍵であるとしてコミュニケーション行為を重視した (Zierhofer, 1997)。意味論を前提とする語用論は、コミュニケーション (意味) と地表空間の構成 (物質) との関係についての分析だけでなく、任意の行為の規範的意味を体系的に考察するものとして注目される。
- 36) 「空間排斥主義」のなかには急進派と穏健派とがあり、急進派は、ハルト (Hard, 1993) やクリューター (Klüter, 1986) のように、社会的な事実は空間構造から完全に独立しており、注29) でも触れたように、空間に投影した現象だけを考察する場合には社会現象の多くを捨象することになり、その内容を十分には捉えられないとみる。これに対してヴァーレンら穏健派の主唱者は、社会的文化的な事実は空間的カテゴリーよりも社会科学的概念 (たとえば行為理論) でもって特徴づけられているとみる (Weichhart, 1999)。その際にヴァーレンは、行為にみられる空間的側面の重要性を強調した。
- 37) チアホーファーの空間分類は、プロートフォーゲルやヴァイヒハルトの空間概念の整理とは異なったものと考えられる。
- 38) ヴァイヒハルト (Weichhart, 1999) は、「地理学者の多くは空間が自分たちの中心的な知的関心であるとし、それをもって地理学の決定的な鍵概念であると主張する。歴史が時間の学問であるように、地理学は空間の科学であるとみる。しかしこの概念を全体的に受け入れられる定義にしようとする」と

- 広いコンセンサスはえられない」という。
- 39) チアホーファー (Zierhofer, 1997) は、「アングロサクソン地理学やスウェーデン地理学においては構造化理論は受け入れられたが、行為理論の基礎に関する論議はなく、ヴァーレン (Werlen, 1987) は社会科学の行為理論を体系的に考察した最初の人として高く評価している。しかし、ヴァーレンの研究は意識哲学に基づく行為理論であり、言語哲学とくに語用論的展開はみられない」という。
- 40) ただし、クリューターは組織理論が主体重視の行為理論にとって代わるべきであると述べていない。
- 41) ヨーロッパの新しい地域や地域形成を論じたブルン編 (Brunn, 1996) やドイツ地誌研究所の出版物などが貴重な研究としてあげられよう。
- 42) このほかに4つの第2次のテーマが考えられている。それには、①技術、②(国際的)空間分業のなかでのその地域の位置、③空間構造的パターン、④自然環境があげられる。
- 43) これについてはプロートフォーゲルやマーフィー、ヴァイヒハルトらの研究がある (Blotevogel, 1996; Murphy, 1991; Weichhart, 1996)。
- 44) この見方は上述のダニエルチークの主張と類似するが、一方ではグローバル化した今日、空間的分化は意義を喪失してきており、地域は取り残された歴史的遺物に過ぎないとみる人もある (Blotevogel, 1996)。
- 45) 中小企業のイノベーションにとって地元環境 (local milieu) の役割が重要であるとする研究を指す (森川, 2000b)。
- 46) ヴァーレンの修士論文「社会科学と地理学における機能主義」(1980年)はバーテルスによって評価され、1980~81年の1年間キール大学地理学教室においてバーテルスの助手を勤めた際に、行為重視の社会地理学の思想を発展させたといわれており、バーテルスとヴァーレンの間には強い関係があった (ヴァルデンガ博士のご教示による。2000年8月28日)。
- 47) しかし、上述したように、ポパーの三世界論とシュッツの準三世界論とは内容を異にしているように思われる。
- 48) ヴァーレンが「日常的地域化の社会地理学」を考えるようになったのは1988年のことで、空間的言語によって社会文化的事実を記述し説明しようとしたとき、その社会的成果に疑問を抱いたことによる。このときの研究成果は1988年秋ザルツブルクで開催された「地理学・社会理論に関するイギリス・オーストリア第1回ゼミナール」で発表した。その後1989~90年の1年半の間ギデンズのいるケンブリッジ大学に滞在し、社会理論を深く考察する機会をえたという (Werlen, 1995/99, S.10)。
- 49) 地域が「真に存在する全体的なもの (real existente Ganzheiten)」から「分析上の構築物 (analytische Konstrukte)」とみられるようになったのは、ヘットナーを除けば1960年代・70年代であったが (Blotevogel, 1996)、当時それがすでに人間行為によって形成されたことが明白に知られていたかどうかは疑問である。
- 50) その代表としてベリーの研究 (Berry, 1964) があげられる。
- 51) ヴァルデンガ博士によると、ドイツ地理学では1970年ころまでは地理学の内部ばかりをみてきたが、それ以後は隣接科学など外部世界にも注目するようになったという。
- 52) 11人の執筆者を空間排斥主義者とその他に区分すると、ハルト、クリューター、チアホーファー、ヴァイヒハルト、ヴァーレンは空間排斥主義者に属するのに対し、プロートフォーゲルとモイスブルガーはそれに同調しない。さらにダニエルチークとオーセンブリュッゲも少し弱められているが、なお空間のなかで起こる社会現象を分析する立場にある。ザールは空間排斥主義に傾いているが、シャフラネク論文はドイツ語圏地理学の現状紹介を主としており、彼自身の態度は不鮮明である。しかし、このような類型化は決して単純ではなく、ハルトとクリューターはルーマンのコミュニケーション理論に基づくのに対して、ザールやヴァーレンはギデンズによる構造化理論により、ヴァイヒハルトやチアホーファーは人間生態学を重視する。特にチアホーファーは最近主体的行為者・ネットワーク理論 (Aktor-Network-Theorie) の方向において研究しており、これには「架橋科学としての地理学」が伝統的地理学において重視されたこともあって、プロートフォーゲルも共鳴している (ヴァルデンガ博士のご教示による。2000年11月24日のメール)。
- 53) ハルト (Hard, 1993) は、社会科学における「空間」を社会的コミュニケーションの構成要素とし

て考察するクリューターの主張を強く支持する。

- 54) 組織にみられる序列は会議などの座席というかたちでも空間に反映されており、空間を通して社会の重要部分をみる事ができる (モイスブルガー教授のご教示による。2000年8月25日)。
- 55) チアホーファー (Zierhofer, 1997) は、科学哲学の主流はポパーの批判的合理主義やシュッツの現象学からハーバーマスの語用論に移行しているように述べているが、プロトフォーゲルは彼の憶測に過ぎないとみている (プロトフォーゲル教授のご教示による。2000年11月24日のメール)。

文 献

- 小林浩二・佐々木博・森和紀・加賀美雅弘・山本充・中川聡史・呉羽正昭編著 (2000)：『東欧革命後の中央ヨーロッパ-旧東ドイツ・ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの挑戦』二宮書店, 258p.
- 森川 洋 (2000a)：ベノ・ヴァーレンの地理思想-『日常的地域化の社会地理学：グローバル化, 地域, 地域化』を中心として。地誌研年報, vol.9, pp.91-128.
- 森川 洋 (2000b)：ヨーロッパにおける企業間ネットワークの研究動向。地理科学, vol.55, pp.47-66.
- Bahrenberg, G. und Kuhm, K. (1999): Weltgesellschaft und Region – eine systemtheoretische Perspektive. *Geogr. Zeitschr.*, 87. Jg., S.193-209.
- Barker, R. G. (1968): *Ecological psychology: Concepts and methods for studying the environment of human behavior*. Stanford. (Weichhart による)
- Bartels, D. (1968): *Zur wissenschaftstheoretischen Grundlegung der Geographie des Menschen*. *Geogr. Zeitschrift Beihefte*, 225S.
- Berry, B. J. L. (1964): Approaches to regional analysis: a synthesis. *A. A. A. G.*, vol.54, pp.2-11.
- Blotevogel, H. H. (1993/95): *Raumkonzepte in der Geographie und Raumplanung*. *Geogr. Inst. Diskussionspapier 2/1993*, Univ. Duisburg, 49S. (Raum. in 'Handwörterbuch der Raumordnung', ARL, 1995, S.733-740)
- Blotevogel, H. H. (1996): Auf dem Weg zu einer "Theorie der Regionalität": Die Region als Forschungsobjekt der Geographie. Brunn, G. (Hg.): *a. a. O.*, S44-68.
- Blotevogel, H. H. (1998): *Geographische Erzählungen zwischen Moderne und Postmoderne – Thesen zur Theoriediskussion in der Geographie am Ende des 20. Jahrhunderts*. Institut für Geogr. Diskussionspapier 1/1998, 26S.
- Blotevogel, H. H. (1999): Sozialgeographischer Paradigmenwechsel? Eine Kritik des Projekts der handlungszentrierten Sozialgeographie von Benno Werlen. Meusburger, P.(Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.1-33. (Institut für Geographie, Diskussionspapier 1/1999, Univ. Duisburg として同年に刊行)
- Brunn, G. Hg. (1996): *Region und Regionsbildung in Europa*. Nomos Verlagsgesell., Baden-Baden, 327S.
- Buttimer, A. (1969): Social space in interdisciplinary perspective. *Geogr. Rev.*, vol.59, pp.417-426.
- Buttimer, A. (1976): Graping the dynamism of lifeworld. *A. A. A. G.*, vol.66, pp.277-297. (Werlen による)
- Buttimer, A. (1979): Le temps, l'espace et le monde vécu. *L'Éspace Géographique*, vol.4, pp.243-254. (Werlen による)
- Carol, H. (1956): Zur Diskussion um Landschaft und Geographie. *Geogr. Helvetica*, 11. Jg., S.111-132. (Weichhart による)
- Claval, P. (1970): Geographie als sozialwissenschaftliche Disziplin. Bartels, D.(Hg.): *Wirtschafts- und Sozialgeographie*. Kiepenheuer und Witsch, S.418-434. (Werlen による)
- Danielzyk, R. (1999): Ein Konzept für empirische Regionalforschung. Meusburger, P.(Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.213-230.
- Eisel, U. (1982): Regionalismus und Industrie. Über die Unmöglichkeit einer Raumwissenschaft als Gesellschaftswissenschaft und die Perspektive einer Raumwissenschaft als Gesellschaftswissenschaft.

- Sedlacek, P.(Hg.): *Kultur-/Sozialgeographie*. Paderborn, S.125-150. (Hard による)
- Fliedner, D. (1993): *Sozialgeographie. Lehrbuch der Allgemeinen Geographie*. Walter de Gruyter, Berlin/ New York, 718S.
- Gerling, W. (1949): *Die Bewertung der modernen Technik im geographischen Denken unserer Zeit*. Würzburg. (Weichhart による)
- Gerling, W. (1954): *Die moderne Industrie*. Würzburg. (Weichhart による)
- Gerling, W. (1965): *Der Landschaftsbegriff in der Geographie. Kritik einer Methode*. Würzburg. (Weichhart による)
- Giddens, A. (1981): *A contemporary critique of historical materialism. vol.1, Power, property and the state*. Macmillan, London. (Werlen による)
- Giddens, A. (1991): *Modernity and self-identity. Self and society in the late modern age*. Cambridge: Policy Press. (Werlen による)
- Giddens, A. (1995): *Konsequenzen der Moderne*. Frankfurt: Suhrkamp. (Werlen による)
- Gren, M. (1994): *Earth writing exploring representation and social geography in-between meaning/ matter*. Dept. of Human and Economic Geography, Univ. of Gothenburg. (Zierhofer による)
- Habermas, J. (1981): Einleitung: Wozu noch Philosophie? Habermas, J.(Hg.): *Philosophisch-politische Profile*. 3 erw. Aufl., Frankfurt, S.15-38. (Oßenbrügge による)
- Hard, G. (1970): *Die "Landschaft" der Sprache und die "Landschaft" der Geographen. Semantische und forschungslogische Studien zu einigen zentralen Denkfiguren in der deutschen geographischen Literatur*. Bonn, Colloquium Geographicum, Bd.11, 278S. (未見)
- Hard, G. (1993): Über Räume reden. Zum Gebrauch des Wortes "Raum" in sozialwissenschaftlichem Zusammenhang. Mayer, J. (Hg.): *Die aufgeräumte Welt-Raumbilder und Raumkonzepte im Zeitalter globaler Marktwirtschaft*. Rehburg-Loccum, Loccumer Protokolle, 74/92, S.53-77.
- Hard, G. (1998): Eine Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. *Erdkunde*, 52. Jg., S.250-253.
- Hard, G. (1999): Raumfragen. Meusburger, P.(Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.133-162.
- Hirsch, J. (1990): *Kapitalismus ohne Alternative? Materialistische Gesellschaftstheorie und Möglichkeiten einer sozialistischen Politik heute*. Hamburg. (Danielzyk による)
- Klüter, H. (1986): *Raum als Element sozialer Kommunikation*. Gießener Geogr. Schr. 60, 188S. (未見)
- Klüter, H. (1999): Raum und Organisation. Meusburger, P.(Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.187-212.
- Köck, H. (1997): Die Rolle des Raumes als zu erklärender und als erklärender Faktor. Zur Klärung einer methodologischen Grundrelation in der Geographie. *Geogr. Helvetica*, 52. Jg., S.89-96.
- Luhmann, N. (1978): Organisation und Entscheidung. *Wieder abgedruckt in N. L. (1981): Soziologische Aufklärung 3*. Opladen, S.335-389. (Klüter による)
- Marden, D. (1992): "Real" regulation reconsidered. *Environ. & Plan., A*, vol.24, pp.751-767. (Danielzyk による)
- Massey, D. (1992): Politics and space/time. *New Left Review*, vol.196, pp.65-84. (Weichhart による)
- Massey, D. (1999): Philosophy and politics of spatiality: Some considerations. Massey, D.: *Power geometrics and the politics of space-time*. Dept. of Geogr. Heidelberg Univ. (Hettner-Lectures 2), pp.27-42. (Meusburger による)
- Meusburger, P. (1998): *Bildungsgeographie. Wissen und Ausbildung in der räumlichen Dimension*. Spektrum Akademischer Verlag, 569S.
- Meusburger, P. (Hg.)(1999a): *Handlungszentrierte Sozialgeographie. Benno Werlens Entwurf in kritischer Diskussion*. Erdkundliches Wissen 130, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 268S.
- Meusburger, P. (1999b): Einleitung—Entstehung und Zielsetzung dieses Buches. Meusburger, P. (Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.vii-ix.
- Meusburger, P. (1999c): Subjekt-Organisation-Region. Fragen an die subjektzentrierte Handlungstheorie. Meusburger, P. (Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.95-132.

- Murphy, A. B. (1991): Regions as social constructs: The gap between theory and practice. *Progress in Human Geography*, vol.15, pp.22-35.
- Oßenbrügge, J. (1997): Rezensionenartikel: Werlen, B.: Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Bd.1 und Bd.2 (Erdkundliches Wissen, Bd.116 u. Bd.119), *Zeitschr. f. Wirtschaftsgeogr.*, Bd.41, S.249-253.
- Oßenbrügge, J. (1999): Total entankert, normal verstrickt. Anmerkungen zur Situation der Geographie und ihrer Reformulierung durch Benno Werlen. Meusburger, P. (Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.35-41.
- Pohl, J. (1993): Kann es eine Geographie ohne Raum geben? Zum Verhältnis von Theorie diskussion und Disziplinpolitik. *Erdkunde*, 47. Jg., S.255-266.
- Pred, A. R. (1984): Place as historically contingent process. *A. A. A. G.*, vol.74, pp.279-97.
- Pred, A. R. (1986): *Place, practice and structure. Social and spatial transformation in southern Sweden 1750-1850*. Towata, New Jersey, Barmes and Noble, Cambridge. (Werlen, 1997 による)
- Sahr, W. D. (1999): Der Ort der Regionalisierung im geographischen Diskurs. Meusburger, P. (Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.43-66.
- Schafranek, M. (1999): Regionale Begrifflichkeit und die Dialektik von global und lokal. Meusburger, P. (Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.231-246.
- Scholz, F. (1998): Das Ende der Geographie—nicht nur Polemik. *Rundbrief Geographie*, 151, S.11-15.
- Schultz, H. D. (1999): Natürliche Grenzen als politisches Programm. Hradil, S.(Hg.): *Berichtsband zum Soziologentag in Freiburg 1988*. (Werlen による)
- Sinz, M. (1995): Region. ARL. (Hg.): *Handwörterbuch der Raumordnung*. ARL, S.805-808.
- Stichweh, R. (1998): Raum, Region und Stadt in der Systemtheorie. *Soziale Systeme*, 4, S.341-358. (Hard による)
- Szava-Kovats, E. (1960): Das Problem der geographischen Landschaft. *Geogr. Helvetica*, 15. Jg., S.38-47. (Weichhart による)
- Weichhart, P. (1986): Das Erkenntnisobjekt der Sozialgeographie aus handlungstheoretischer Sicht. *Geogr. Helvetica*, 41. Jg., S.84-90. (Sahr による)
- Weichhart, P. (1993): Vom “Raumeln” in der Geographie und anderen Disziplinen. Einige Thesen zum Raumaspekt sozialer Phänomene. Mayer, J. (Hg.): *Die aufgeräumte Welt. Raumbilder und Raumkonzepte im Zeitalter globaler Marktwirtschaft*. Reburg-Loccum, S.225-241.
- Weichhart, P. (1996): Die Region—Chimäre, Artefekt oder Strukturprinzip sozialer Systeme? Brunn, G. (Hg.): *a. a. O.* S.25-43.
- Weichhart, P. (1998a): “Raum” versus “Räumlichkeit”—ein Plädoyer für eine transaktionistische Weltansicht der Sozialgeographie. Heinritz, G. u. Helbrecht, I. (Hg.): *Sozialgeographie Soziologie. Dialog der Disziplinen*, Münchner Geogr. Hefte, Bd. 78, S.75-88.
- Weichhart, P. (1998b): Kann man Räume wirklich nicht küssen? Schneidewind, P.(Hg.): *Räume kann man nicht küssen*. Planungsgefälle—Planungsfallen. ÖIR-Frühjahrstagung, 1997 Wien, S.1-16.
- Weichhart, P. (1999): Die Räume zwischen den Welten und die Welt der Räume. Meusburger, P. (Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.67-94.
- Werlen, B. (1986): Thesen zur handlungstheoretischen Neuorientierung sozialgeographischer Forschung. *Geogr. Helvetica*, 41. Jg., S.67-76. (Sahr による)
- Werlen, B. (1987): *Gesellschaft, Handlung und Raum: Grundlagen handlungstheoretischer Sozialgeographie*. Erdkundliches Wissen, Bd.89, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 314S. (2. Aufl. 1988, 314S., 3. Aufl.1997, 462S.)
- Werlen, B. (1993a): *Society, action and space. An alternative human geography*. London,1993. (Werlen, 1997 による)
- Werlen, B. (1993b): Gibt es eine Geographie ohne Raum? Zum Verhältnis von traditioneller Geographie und zeitgenössischen Gesellschaften. *Erdkunde*, 47. Jg., S.241-255.
- Werlen, B. (1995): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Bd.1: Zur Ontologie von Gesellschaft*

- und Raum*. Erdkundliches Wissen, Bd.116, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 262S. (1999年には *Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum. Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen, Bd.1*, Franz Steiner Verlag, 256S. として再版)
- Werlen, B. (1997): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierung. Bd.2. Globalisierung, Region und Regionalisierung*. Erdkundliches Wissen, Bd.119, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 464S.
- Werlen, B. (1999a): Handlungszentrierte Sozialgeographie. Replik auf die Kritiken. Meusbürger, P. (Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.247-268.
- Werlen, B. (1999b): The social and the spatial in the globalization process. Pries, L. (ed.): *Transnational spaces*. London: Routledge. (Werlen による)
- Werlen, B. (2001): *Die Geographien des Alltags. Empirische Befunde*. Erdkundliches Wissen, Bd.121, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, Ca. 250S. (刊行予定)
- Zierhofer, W. (1997): Grundlage für eine Humangeographie des relationalen Weltbildes. Die sozialwissenschaftliche Bedeutung von Sprachpragmatik, Ökologie und Evolution. *Erdkunde*, 51. Jg., S.81-99.
- Zierhofer, W. (1999): Die fatale Verwechslung. Zum Selbstverständnis der Geographie. Meusbürger, P. (Hg.)(1999a): *a. a. O.*, S.163-186.

Handlungszentrierte Sozialgeographie in Deutschland: Die Vorstellung von P. Meusbürgers Sammelband

Hiroshi MORIKAWA

Nach der Veranstaltung des Forums mit dem Thema „Autoren stellen sich der Kritik“ von B. Werlen beim deutschen Bonner Geographentag 1997 hat P. Meusbürger einen Sammelband herausgegeben, in dem nicht nur zwei Sprecher des Forums, H.H. Blotevogel und J. Ossenbrügge, sondern auch die an diesen Themen besonders interessierten Geographen und Werlen selbst die Aufsätze geschrieben haben. Ziel dieser Arbeit ist es, der japanischen geographischen Welt den zusammengefassten Inhalt jedes Aufsatzes in diesem Sammelband vorzustellen, weil es mir scheint, dass es für uns sehr wichtig und wirksam ist, die neue Orientierung der deutschsprachigen Geographie kennenzulernen und vorzustellen.

Fast alle Aufsätze sehen die Arbeiten von Werlen als bahnbrechenden Beitrag zur deutschsprachigen Geographie an. Er hat nicht nur die Diskussion über die Betrachtung der Humangeographie in der Sozialwissenschaften in Gang gebracht, sondern auch den Begriff Raum 4, Schauplatz oder Lokale genannt, in die deutschsprachigen Geographie eingeführt. Während Blotevogel und Meusbürger jedoch von verschiedenen Seiten die Arbeiten von Werlen stark kritisieren, schreiben andere Autoren ihre Aufsätze im Kontext ihrer eigenen philosophischen bzw. sozialwissenschaftlichen Perspektiven. Z. B. betont H. Klüter auf der Grundlage von N. Luhmanns Philosophie die Bedeutung der Organisationen für das menschlichen Handeln. Danielzyk diskutiert nicht nur Handlungstheorie sondern auch die Regulationstheorie als bedeutsam an.

Werlen erläutert seinen wissenschaftlichen Standpunkt erneut, ohne dass er alle Kritiken der 10 Autoren im einzelnen beantwortet und sich rechtfertigt. Er bildet sich ein, dass seine handlungszentrierte Sozialgeographie die zukünftige Gesellschaft mit hoch entwickelten Kommunikationen vorwegnehmen kann.

Durch diese Beschreibungen bemerke ich, dass es in einigen wichtigen Fragen der heutigen Geographie verschiedene Standpunkte innerhalb der deutschsprachigen

Geographen gibt. Sie sind wie folgend: (1) Ist für die Humangeographie der Raum ein Forschungsgegenstand oder nur ein Medium ihrer Betrachtung? (2) Liegen zwischen Gesellschaft und Raum enge Verbindungen oder eine grosse Divergenz vor? (3) Sind für die Humangeographie die menschlichen Handlungen allein bedeutsam? Wie soll man dabei die Bedeutung von Organisation und Struktur behandeln? Oder mit anderem Wort: Können die Handlungen der Akteure Funktion und Rolle einer Gruppe bzw. Organisation vertreten? (4) Gibt es in der spätmodernen enträumlichen Gesellschaft die Region und wenn ja, mit welcher Form? (5) Soll man ansehen, dass nur die Regionalisierung von menschlichen Handlungen immer zum Geographie-Machen beitragen kann? Wie soll man die von ihnen aber früher als vor hundert Jahren hergestellten Regionen berücksichtigen?

Auch in Zukunft möchte ich beobachten, in welche Richtung sich die oben erwähnten Auseinandersetzungen weiterentwickeln, und wie sich die handlungszentrierte Sozialgeographie auf empirische Arbeiten der Humangeographie auswirken kann.